

ばあちやるは八重沢なとりと暮らす

ラギア z

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ばあちやるの家が燃えた。

目次

家、燃えた

1

二日目

16

家、燃えた

「ばあちやるくんの家が燃えたんすよおおおおお!!」

「……炎上したんですか」

「物理的に炎上したんすよ……ばあちやるくん家なき子っすよ今……」

桜の木が、蕾を付けた頃。

ばあちやる——私立ばあちやる学園学園長、アイドル部のプロデューサー、シロちゃんのお菓子係……我ながら山ほどある二つ名を持つ男。それが俺である。

そんな俺の家が燃えた。

比喩ではない。燃えたのだ。それはもう、ごうごうと。

「でもばあちやるさん、荷物ほぼこつちに置いてありますよね?」

「いやまあね、全然家に帰れなかつたんでね。荷物はほぼ学園長室と会社にあるんすけど……いやあ、家が燃えるのって中々心に来るんすね……」

「昨日はホテルですか?」

「いえ、ネカフェで時間つぶして徹夜っす」

「……カフェインの大量摂取は体に毒ですよ」

「何を今さら。メンテちゃんも知ってるじゃないすか……ばあちやるくんの忙しさ……」

「だからこそですよ。やっと仕事落ち着いてきたじゃないですか。寝たらどうですか?」

「いやあでも……勤務時間中に寝るのはダメっすよ……」

「まあまあ。倒れられると困りますし。いつも適当なばあちやるさんがぶっ倒れたら、アイドル部の皆に心労を掛けますよ」

「あー……そうっすよねえ……」

メンテちゃんの冷静な言葉に、俺は卓上を見る。そこには紙コップ……飲み干したコーヒーの数は、有に六個を超えていた。

テレビで見た限り、確かその数はやばいレベルだ。

というか知識なしでもやばいって分かる。

「……じゃあ、ちよつと寝ても良いっすか？」

「どうぞ。何かあつたら起こすんで、就業時間内ならばいくらでもどうぞ」

「そんじゃあ失礼して……いやーメンテちゃんマジで良い人っすね完全にな」

「いえいえ。コンビニのプリン・アラモードでいいですよ」

「1200円くらいするじゃないっすか!?! えぐー!」

「流石に嘘ですよ。おやすみなさい」

「ああ……お休みなさい」

俺はスーツの上を脱ぎ、ソファに横たわる。そのまま顔にスーツを被せ、目を閉じた。

家には、特に大切なものがあつたわけではない。

それでも、帰る場所が無くなるというのは、それだけで大きなダメージになるのだと。

俺は分かつたつもりでいて……しかし全然分かっていないことを、後に知るのだった。

——☆——☆——

「失礼します。ばあちやるさんはいらっしやいますか？」

「こんにちは、八重沢さん。ばあちやるさんは……すみません、今睡眠中なんです」

「……珍しい、ですね。どうかしたんですか？」

部屋に入った私を迎えたのは、いつもの彼ではなく、メンテさんだった。

ばあちやるさんは、常に仕事をしているイメージがあつた。それこそ、病的なまでに。

そんな彼が眠っているだなんて。とても珍しい。

たつたそれだけの事実は、それだけで私、八重沢なりに不安を抱かせる。風紀委員長と言う工作上、彼と話す機会が多い。普通の人ならば「休んでいるんだ」程度で済む事も、私から見ればれっきとした異常だった。

「いえ、まあ、特には」

で、短期の出張に行つたのだ。家に残つたのは、学校のある私だけ。旅行も兼ねてなのか、ママやおばあちゃんも一緒に行つた。

だからなのか。私は軽くない寂しさを感じている。それは友達と触れ合つて、それが無くなつた放課後に、主張が強くなつていた。

多分、そんな背景があつたから。

——私はあんなことをして、もつと寂しくなつたんだと思う。

——☆——☆——

残業は久々に無く、定時で上がることが出来た。学園の中は既に暗く、歩いていると少し怖い。

「家に帰つて、皆の配信を見て……ああ、家が無いのか」

自分の日常に組み込まれる、家。そう、それが無い。物件を見に行く暇は無かつたし、今日はホテルだろうか。スーツは買ったほうが速いし、などなどに言われた通り髭や髪も整えなければ。

やることは多い。

仕事がなくとも、同じくらいに疲れそうだった。

ため息を一つ。心なしかバッグが重い。

それでもシロちゃんやアイドル部のため、頑張らなければならぬ。気合を入れなおして、近場のホテルを調べ始めた時だった。

「ばあちやるさん」

突然。正門を出た瞬間に、これを掛けられた。

「ええ、などとじゃないっすか! どうしたんすかもー! 忘れ物っすか? いや取りあえずね、もう遅いんで送っていきますよ!」

「いや、あの、違うんです。私、ばあちやるさんに用事があつて……!」

「え? ばあちやるくんにつすか?」

「はい。……その、ばあちやるさん。私の両親、実は二週間くらい家に居ないんです、けど、」

などなどはそう言つて、言葉を切つた。少しの沈黙。いまだ肌寒い初春、カーディガンの裾をきゅつと握りながら、彼女は俺を見上げる。

目線を一切反らさず。などなどは、頬を赤く染めて——

「……一緒に、暮らしませんか」

「……えっ?」

そんな事を、呟いた。

「いやいやいや、ダメっすよそんなん！ 確かにばあちやるくんね、家がないんすけど、それでも年頃の女の子がそんな事言っちゃダメっすよ完全にね！」

「で、でも！ ばあちやるさんホテルですよね!? それこそお金がやばーしーなんじゃないですか!?!」

「そんなくらいなら払えますっつて！ ばあちやるくんだって貯金くらいしてるんすよー！」

「いやでもその！ 私と暮らすと三食付きますよー！」

「なんすかそのオプション！ 風紀が乱れてるんじゃないすかー?」「みっ……まだ乱してないですうー！」

などなどがバグで俺を叩き始める。頬を膨らませてぽかぽか。見た目は可愛らしいが、実際は教科書などが突き刺さって痛い。いや待って普通に痛い。

……そのまま数秒。などなどの体力切れにより、打撃は止んだ。肩で息をする彼女に、俺はでこピンを放つ。「あうっ」と額を抑えたなどなど。

そんな少女は、息を整え。そして、仕切りなおすように話し始めた。「家に誰も居ないんです。二週間くらい。……寂しいんですよ。急に居なくなつて、こんなこと慣れてないので」

「あ、じゃあばあちやるくんからもちもちとかに話しておきましょうか? もちもちなら来てくれるんじゃないすかね」

「なあーんでそこでそうなるんですか!? さつきからはあちやるさんに来てっつて言ってるじゃないですか!」

「風紀的にアウトっすよー！」

「大丈夫です。風紀乱すような事、ばあちやるさん関連である訳ないじゃないですか」

「ガチトーンじゃないっすか……えぐー……」

「お願いしますばあちやるさん！ 一日だけでも良いので！」

「いや、でも……」

「女の子一人ですよ！ 強盗とか来たらどうするんですか！」

「瞬間移動して行きますよ。などなどがどこにいてもね」

「はうう……」

「はいはいはい、じゃあ分かってもらえたと思うんでね、家に帰りましょうかなとなど」

「……帰りません」

「え?」

「ばあちやるさんが一緒に帰ってくれるまで帰りません」

「ちよいちよいちよーい! いつからそんな我が儘な子になっちゃったんですかもー!」

頑固になった女の子は、割と面倒くさい。だがそこはお任せあれ。シロちゃんとは長く接してきた俺は、こういう時の対処を知っている。

それは——素直に従う事だ。

これ……詰んでるじゃん完全に。

「……一日だけつすよ」

俺は諦め、小さく呟いた。押しに弱いのは昔からで、変わることは無いだろう。それでもまあ、とびつきりの笑顔を浮かべてくれるのだから、悪い気はしなかった。

「それじゃあ、行きましょう! 晩御飯の材料買って行ってもいいですか?」

「勿論つすよ。ばあちやるくんね、コンビニでささっと買うんでね」

「え?」

「えつ?」

「……もう!! どうしてそう貴方はああああ!!」

——☆——☆——

「えつ……いやマジで美味しい……」

「コンビニとどっちが美味しいですか?」

「いやこっちに決まってるじゃないっすか!! 最高つすよこれ完全にね!!」

「ふふん、アイドル部で女子力が一番高いまでありますからね」

流石に他人の食費を圧迫するわけにはいかない。そう思い、せめて夕飯だけは自分で用意しようと思っていた。しかし気付けば、なとな

とに押し切られ、彼女特製の夕飯を食べることに。

そのご飯は、疲れなどを全て吹き飛ばすほどに美味しかった。

良かった。スーパーでの会計の時、譲らずにお金を払っていて良かった。

作ってもらうのだから、と。それだけの理由で払ったが、あの時払っていなかったら俺は今ひれ伏していただろう。今でさえも危ういのだ。どれだけ手間を掛けたのか。一人暮らして自炊の経験もある俺は、ひたすらに彼女を尊敬し始める。

「いやあ……マジでもう最高っすねこれね！　お店で出せますよこれ！」

「そうですか？　お世辞で言ってるんじゃないですかー？」

「などなどはね、たまたまじゃ無いっすからね。ガチで褒めてますからねはいはいはい」

「それ遠回しな会長への悪口じゃないんですか!？」

温かい。物理的な温度だけでなく、なんというか、心が温かい。

「コンビニ弁当じゃあ物足りなくなっちゃいますねこれ完全にね！」

「毎日作っても……その、良いですよ？」

「毎日会わないじゃないっすか。休みもありますし」

「そーゆーところですよばあちやるさん」

「ええっ?!　今何かやつちやつたんすか!？」

向かいの席に座り、彼女はエプロンを外す。下は着替えたらしく私服で、髪は一つに纏められている。頂きますと呟き、などなどは箸を伸ばした。

「……何ですか、じつと見て」

「いや、何でもないっす」

……新妻感を感じた。なんて、口が裂けても言えない。

いやでも許してほしい。俺はそもそも誰かの手料理を食べること自体が久々で、向かいには嫁感が滅茶苦茶強いなどが居るのだ。そろそろ結婚を急かされる年頃、そういうったものに憧れるのも、無理はない。だろう。

「味付け、いつもみたいにやっただけ……ばあちやるさんはど

んなのが好きなんですか?」

「ばあちやるくんは全部好きっすよ。強いて言うなら濃い目の方が好みっすかね」

「そうなんですか。明日のお弁当はそうしますね」

「……え? お弁当?」

「だってばあちやるさん、絶対コンビニ弁当とかですよ?」

「ま、まあそうっすね」

「ダメとは言いませんが、どうしても栄養バランスが崩れちゃいますから。私が作りますよ」

「そこまでしてもらうのは流石に悪いっすよなと〜」

「コンビニ弁当じゃ物足りなくなるって言ったじゃないですか。お世辞だったんですか?」

「そんな訳ないじゃないっすか!!」

「ですよ。信じてます。それなら作っても良いですよ?」

「……あー、もう……お返し、絶対しますからね。何が良いか考えといて下さいね!」

「はい。ありがとうございます、ばあちやるさん」

にっこり笑うなどと。机に伏せる俺。語彙力が無いというのは、こんなとこにまで響くのか。

いやでも女子高生に口で負かされるってどうなんだ。学園長やってんのに。

「そーいやばあちやるくん、どこで寝たら良いんすかね?」

「空き部屋が一つあるので、そこで良いですか?」

「部屋貸してもらえるんすか!?! 床で良いっすよばあちやるくん」

「私が許しません。ばあちやるさんただでさえ忙しいんですから、寝る時くらいベッド使ってください」

「もうこれね、などと頭にがんないっすね完全にね」

全力でもてなされている。料理も美味しい、配信の経験からか話も面白い。

このままでは行けない。流石に大人の男として情けない。

「などと、皿洗いはやりますからね! ばあちやるくんね、全部任

せてくれて良いっすからね！」

「じゃあ、一緒にやりましょうか。私これ持って行くんで、ばあちやるさんそっちお願いします」

「……あれ。などなともやるんすか？」

「当たり前じゃないですか」

何故か表情の一つ一つが輝いているなどなど。キラキラに押されるがままに台所へ行き、二人で並んで皿洗い。たどたどしい俺に比べ、彼女はとても手際が良かった。正直役に立ってるか分からないまま、食器があつという間に綺麗になる。

「んーと、次はお風呂ですね。さつき洗っちゃったんで、もう入れますよ。お先にどうぞ」

「いやね、一番風呂はやつぱ家主だと思っくんすけどねはいはい」
「私の残り湯に浸かりたいんですか」

「一番風呂貰いますね！ あぎーすあぎーす！」

俺はコンビニで買った着替えを抱え、さつき教えてもらった浴室へと駆けた。

——☆——☆——

ばあちやるさんが出たお風呂。おふろ。

タオルを裸足で踏んだ瞬間、シャンプーの香りを感じた。それはいつも、私が使ってる物だ。

なのに……何故か全く違う物に思える。

彼が、すぐ前にここに居た。

たかだかそんな事で跳ねる心臓。落ち着けるために息を吸い込めば、それは逆効果。微妙な、ともすれば気のせいで済ませられる様な匂いが、私を震わせた。

顔が熱かった。それをお風呂の所為にするために、私はお湯へ飛び込む。

そして、数十分後。すつかりのぼせた私は、若干ふらふらしながらリビングへ。肩にタオルを掛けたままソファに沈み、天井を見上げる。

……あれ。ばあちやるさんは？

「あー！　なとなとダメじゃないっすか髪乾かさないとー！」
「ふえ？」

「なとなとはね、髪がね、もうとんでもなく綺麗なんでね！　乾かさなきや勿体ないすよー！」

「……拭いてください」

「いや……まあ、そんなくらいならやりますよ！　じゃあなとなと、ちよつとタオル借りますね」

おお。我儘が通った。

いや、この人は我儘はある程度聞いてくれる。けれど、直接的なスキンシップは拒むのだ。それでも、髪を拭くくらいならやってくれるらしい。覚えておこう。これはとっても、私にとっては有意義な情報だ。

「どうっすか？　くすぐりたいとことかあります？」

「んー……大丈夫です……気持ちいいです」

眠い。温かい。まだ頭がぼーっとしている。目の前には寝巻の彼。その胸元。

眼だけを上に向けると、真剣な彼の顔が見える。私の髪を拭くだけなのに。

それだけ、アイドル部を大事にしてくれているのだろうか。

いや——今だけは。彼は、八重沢なとりを大事にしてくれているのだろう。

そう思うと、なんかむず痒かった。

何よりも。

「……なとなと、めっちゃ嬉しそうっすね。どうかしたんすか？」

「どうしたんでしょうかね？」

「なんで疑問形なんすか……」

——☆——

「……おきてくださいーい」

耳元で声が聞こえた。

背中が柔らかい。頭も柔らかい。いつも付きまとっていた疲労感も、すっかり消えていた。

快眠。最高と言っても過言ではない。久々に、気怠さの無い朝。俺はベッドの横のカーテンを開こうとし、手が壁にぶつかるのを感じた。

そうだ。家は、燃えたんだ。

一抹の寂しき。軽くなっても、残る感情。
待ってくれ。

じゃあ、ここはどこなんだ――。

「起きて下さい、ばあちやるさん」

「うおっ!？」

覚醒しかけていた意識が、ぐっと引き起こされた。慌てて目を開けば、知らない天井。

次いで視界に入ってきたのは、少女の笑顔だった。

「……な、などと？」

「おはようございます、ばあちやるさん。顔を洗ったら、朝ごはん食べましょうね」

などなどはそう言うと、カーテンを開けてから部屋を出て行った。朝の陽ざしはとて眩しく、俺は目を瞑る。

俺は、などなどの家に泊った。

その事実を思い出し、何とも言い知れぬ感情を欠伸とともにかみ殺す。それでも有り余るのは、幸せと元気だった。自然と口元には笑みが浮かび、ベッドからの脱出もスムーズに終わる。

かつたるい平日の朝が、今は心地よかった。

そのおかげか。普段ならば一日掛かる仕事が、半日で終わった。

今はお昼休憩。生徒たちも昼休みだ。学園長室には俺とメンテちゃんだけ。あまりにも早く俺の仕事が終わってしまったため、メンテちゃんの仕事を少し手伝っている。

「メンテちゃんーん! こっち終わりましたよー!」

「効率がおかしい。あとなんでそんなに元気なんですか」

「はいはいはい、いやーね! まあちよつとあったんすよー!」

「……はい、こっちも終わりました。ご飯食べましょうか」

パソコンを閉じ、二人してお弁当を取り出す。

バッグの中から出したのは、青色の風呂敷に包まれた弁当箱。二段弁当だった。

上には彩色豊かなおかずや野菜。下にはふりかけご飯。一緒に入っていたメモには、お仕事頑張って下さいというメッセージと絵が。

最高に嬉しいぞこれ。

今までそんなメッセージを受け取った事が無かった俺のテンションが、爆発的に上がった。

嬉しさでによよとする頬を手で揉んで、何とか落ち着ける。

「いただきますーす!」

「いただきます。ばあちやるさん、今日はなんのべんと……う……」

早速小さなハンバーグを頬張る。人生の中で一番美味しい弁当が更新された瞬間、突然メンテちゃんが詰め寄ってきた。

「ば、ばあちやるさんがコンビ弁当じゃない!」

「うおっ、いやね、ばあちやるくんも毎日毎日コンビニ弁当じゃないんすよ」

「嘘! 私と仲間だと思ってたのに!」

「そんな事思われてたんすか!」

「ちよ、ちよつと頂きますね」

「あつばあちやるくんの卵焼き!!」

メンテちゃんは素早く卵焼きを掻っ攫った。止める間もなく。

「……すっごい美味しいですねこれ」

目を見開き、ゆっくりと呟いた。大げさで無いがゆえに、それが演技ではないと分かる。

次のおかずを掴もうとしていた箸を止め、俺も卵焼きを頬張った。

「いや、マジで……美味しいすね。やばーしーっすね」

「その言い方だと他の人に作ってもらったみたいですね」

「ははは、まさか」

「うふふ、ですよね」

「……」

「……」

固く繋がれた手。白く細い指は、何よりも強く、五指を掴んでいる。

「……ありがとうございます、などと」

「気にしないで下さい。当たり前的事ですよ」

こっちを向かず、などとは返事する。優しい気な、本心だと伝わってくる声音。それは心をじんわりと包み、染みていった。

「ほんと、風紀を正す以外は何でも出来るんすねなどと」

「んなあー!? 風紀! も!! 正してますから!」

二日目

「良いですかばあちやるさん。これからは何か足りないとか、荷物を運ぶとか、そんな些細な事でもお手伝いを頼んで下さい。正直アイドル部全員、ばあちやるさんが仕事をしすぎじゃないかって心配してるんですからね」

「いやでもね、やっぱばあちやるくん一人で終わらせられる事をね、わざわざ頼んで迷惑掛けるのは嫌なんすよ……」

「迷惑と！ 思って！ 無いんですー！」

半ば強引にお風呂に叩き込まれ、上がったのがついさっき。

などなどに怒られながら、彼女が淹れてくれた熱いコーヒーを飲み込む。

「試しに明日、たま会長にでも頼んでみたらどうですか？」

「『やだー、馬P一人でやってよー！』」

「……言いそうだけど言わないと思います。多分」

機会があれば、と俺は口に出した。

基本的に学園長室に居ると、関わるのはメンテちゃんだけだ。生徒と関わる事は少ない。要はそんな機会なんぞ数少ない訳で、それは彼女も分かっていた。

ちよつとばかし膨れっ面になるなど。制服からルームウェアに着替えていた。

時刻は六時半。そろそろ晩御飯を作り始める時間だ。

「ばあちやるさん。お魚と鶏肉、どっちが好きですか」

「ばあちやるくんっすか？ ばあちやるくんはっすねー、いや……あ、などなどはどっちが好きなんすか？」

「お魚です」

「じゃあお魚っすかね！」

「……もう。明日の夜はわさび丼にしますよ？」

「えっ」

さりげなく、明日もなどのご飯を食べる事になっている。が、それには気づかず。スマホで調べてみれば、わさび丼はマジであっ

た。

明日が命日か？

——☆——☆——

ただただ偶然。自らの幸運に感謝する。

私が席を立った後。彼は一人でわちやわちやし、今はパソコンを開いて仕事をしていた。なんというか、忙しい人だ。リアクションも含め全てが軽いのに、頼れるし仕事が出る。アイドル部という存在に欠かせない人物。

かくいう私も、ばあちやるさんに悪い感情は抱いていない。

寧ろ、言うなれば、その逆だった。

そんな人物が、二日連続で私の家に泊まる。それはとても嬉しい事だ。ただ単純に、彼の近くに居る事が出来る。料理含め、家事が一通り出来る事が強みになる。昨日から部屋着を少々大人っぽくしてみた。彼には効いているだろうか。

……知りたくても、聞けない。

それを聞くには、とんでもなく甘えられる状況が必要だ。記憶が飛んでいた、なども言える様な。

まあ、そんな状況は来ないと思う。

「……よし、一通り終わりましたね」

手を洗って、私は息を吐いた。

あとはほぼ、待つだけだ。他に何か作れそうな物がないかと探してみても、思い浮かばない。

エプロンを外して、私はリビングへと戻る。ばあちやるさんの後ろに立つと、彼は手を動かしながら話しかけてきた。

「どうしました？」

「いえ、お料理のほうが一段落したので来たんですけど……。見てても大丈夫な奴ですか？」

「問題ないっすね。これはあれっす、アイドル部の皆のスケジュールなんでねはいはいはい」

「あー。……ばあちやるさん、またコラボ配信とかやらないんですか？」

「今んとこ予定は無いっすね。ばあちやるくんが出てもっすね、邪魔だー！ って思う人が沢山いると思うんでー、やっぱね、可愛い皆だけでコラボした方が良いんすよ」

「……その割にはたま会長と沢山コラボしてるんじゃないですかー？」

「あれはまあ、そのーあれっすよ！ ほら、たまたまがね、やりたい事をばあちやるくんがサポートしてるだけっすよ完全にね！ ばあちやるくんじゃなきゃ出来ない事が大半っすからねはいはいはい」
「イラっ。と、心がざわつく。」

その感情が嫉妬だと気付き——、思うがままに、私は動いた。彼の首を抱きしめるように手を伸ばし、大きな手をぺちんと払いのける。

「ちよいちよいちよい！ 何やってんすかなとなー！」

慌てる彼の声を無視。少し悩んで、私は明後日のスケジュール表を開く。その日は、夜八時から配信の予定があった。

……麻雀の添削。男声役。なるほど。確かに、アイドル部の立場から見ればばあちやるさんしか出来ない事だろう。私たちとコラボして一番波風が立たないのは、立場のあるばあちやるさんだ。

だから考えよう。私が、私の立場を利用して、彼だけとコラボする方法を。

「……ばあちやるさん」

「もー、どうしたんすかなとなー」

私は自分の名前の横にカーソルを持っていく。少し悩んでから、打ち込み始めた。

「コラボしましょう。特別版などないと、ゲストに来てください」

「マジンガー!? いやそれね、ばあちやるくんじゃなくて……あっ！

すずすずとかどうっすか？ いやー、ピーピーとはコラボしたんでー、やっぱここはね、ラマーズトリオのもう一人とコラボなんてどうっすかね？」

「……風紀チェックしようと思うんですよ。だからばあちやるさんが一番良いな、って」

「あー！ なるほどー！ ……あっ、じゃあたまにします？」

やっぱね、ばあちやるくんよりね、生徒たちと沢山話してる生徒会長の方が良いんじゃないすかね！」

彼は焦りながら、言葉を発す。そんなに私とコラボするのが嫌なのだろうか。

……いや、多分違う。ばあちやるさんはきつと、「自分よりも」と思っているのだろう。自分よりも他の人と。他の人の方が。自身を卑下しているのだ。

一番害悪なのは、それが彼の本心だということ。心の底から、純粹にそう信じているのだ。

「ていつ」

「ウビバツ!？」

ちよつと力を込めて。手のひらを、彼の耳に押し付けた。外の音が聞こえないように、ぐつ、と。

慌てている。それでも、ばあちやるさんは抵抗しない。何か言っているけど、私の耳には届かない。手は出さない優しさは、私にとってはず痒いだけの物だ。届かない背中の痒みの様に、燻る何か。けれど、その甘さに、私は浸った。

「——他の誰でもなく。貴方が、良いんです」

小声で呟く。黒髪に顎を押し付けて、耳を塞いで。

何も伝わるな。彼に何も伝わるな。

相反する感情と行動。恥ずかしいくらいにドストレートな行動に、私は頬の熱さを自覚する。

「……まああれですよ。ばあちやるさんに拒否権なんて無いですしー？」

「え、えぐー！ ばあちやるくんにもっと優しくして欲しいっすね！」

「へーんだ！ そろそろご飯ですから、片づけ始めて下さいね」

「おっけーつすよなとなー！」

私は彼に背を向ける。口元を手で覆う。

……顔に触れる指先は、震えていて、とてもとても熱かった。



「じゃあ、お風呂行ってきます」

「了解つす！ この後配信ありましたっけ？」

「はい。遅れないようにはしますよ！」

「まあなとなとなら大丈夫つすよね！ てらてらー！」

などなどがお風呂に消えていった。俺は彼女の淹れてくれたコーヒーを飲み、ソファに体重を預けた。

そして。

(聞こえてるんすよなとなとおおおおおおおおおおおおお!!!)

悶えた。

(耳塞がれても結構聞こえるんすよ!! 頭の上に顎乗つけられるのも分かったし！ 背中も結構あれだったし!! 温かいし柔らかいしあんな事言われるし!!!)

確かに、俺はアイドル部の皆とスキンシップが無いわけではない。絶対に一線は超させないものの、パーソナルスペースは個人差がある。それを拒絶することは、俺の流儀に反する。イオリンやもちもちは近いし、すすすずなどは一般的な広さだ。個人個人の距離を他人が勝手に決めるのは、魂の自由を縛りかねない。

出来る限り自由に。出来る限り不自由なく。

魂の輝きをありのままに。

それが俺のモットーの一つだ。

が、彼女たちは容姿的にも優れている存在である。

俺とて男。くっ付かれて、何も感じない訳ではないのだ。

(あんな事言われたらコラボするしかないじゃないっすか……やばーしーやばーしー)

髪を掻き揚げる。長く息を吐いて、俺は目を腕で覆った。

いや何。八重沢なとりは、プロデューサーがドキドキするレベルのアイドルだと再確認出来ただけだ。見慣れている俺でもこの有様なのだから、彼女の魅力は最早言うまでも無い。

その矛先が俺に向いてなければ、安心出来たのに。

彼女たちの魅力が一番知っているのは俺だ。同時に、それらを一番無視しなければならぬのも俺。

難儀な物だ、と。

もう一度息を吐く。ソファを離れて仕事を始めても、などなどの言葉はずっと脳裏に張り付いていた。

数十分後。などなどがお風呂から出てきた。

「などなどがね、配信してる間はばあちやるくん静かにしてるんでね！」

「はいはい聞こえたら稲鞭ですからね！ 多少の音なら全然大丈夫ですから、あまり神経質にならないで下さいね」

彼女は俺に釘を刺すと、ほうじ茶を持って自室へ。扉が閉まる音が聞こえた瞬間、俺はどつと力を抜いた。

一晩寝れば、きつとこの混乱も収まるだろう。人間というのはそういうものだ。

彼女にはいつも通りに接せば良い。もう夜も遅いし、配信が終わったらなどとも寝るだろう。俺も今日は早く寝て、明日に備えるのが吉か。

幸いというか、さつきまでやっていた仕事は終わっている。

やらなければならぬ事を確認し、それがほぼ無い事を認識。パソコンの電源を落としてから、俺はスマホをいじり始めた。

その、一時間半ほど後。

暗い部屋。カーテンを閉め、電気を消した部屋の入り口で――、

「……一緒に、寝て下さい」

俺は、八重沢なとりに、抱き着かれていた。